湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

大学名　湘南医療大学
所　属　保健医療学部　リハビリテーション学科
作業療法学専攻
名　前　三川　年正
作成日　2026 年 4 月 28 日

1.　教育の責任

私が担当している科目は、精神障害作業療法学Ⅱ、作業分析学、地域作業療法学Ⅰ、地域作業療法学Ⅲです。

精神障害作業療法学Ⅱでは、精神医学の復習を行いながら、国家試験に沿った問題対策や疾患別の作業療法について講義しています。これは、将来の国家試験対策としてだけでなく、臨床に出た際に必要となる疾患別作業療法の知識を身につけることを目的としています。

作業分析学では、作業療法士の治療手段である「作業分析」について学びます。作業活動における動作や行動の変化が、身体的・心理的にどのような影響を与えるのかを理解し、目的とする効果を確実に得るための分析技術を習得します。

地域作業療法学Ⅰでは、介護保険制度における作業療法士の役割について学び、地域支援に必要な制度的理解を深めます。

地域作業療法学Ⅲでは、地域における精神科作業療法士の役割を学ぶとともに、地域生活支援に必要な制度や環境整備について理解を深めます。

科目名	開講年度	必修／選択	担当コマ数
精神障害作業療法学Ⅱ	3 年前期	必修	15/15　(科目責任者)
作業分析学	3 年前期	必修	8/15　(科目責任者)
地域作業療法学Ⅰ	3 年前期	必修	8/15　(科目責任者)
地域作業療法学Ⅲ	3 年後期	必修	15/15　(科目責任者)
作業療法概論	1 年前期	必修	1/15
作業療法研究法	3 年前期	必修	2/15
作業療法研究法演習	3 年後期	必修	15/15

2.　私の理念・目的

1)私の理念

私の教育理念は、グループの理念である「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」を基盤としています。学生には、この理念を将来担当する患者様への姿勢として大切にしてほしいと考えています。まず「人を尊ぶ」とは、対象者を一人の人間として尊重し、誠実に向き合う姿勢を指します。講義の中でも、作業療法士として技術だけでなく、人としての関わり方を常に意識するよう伝えています。「命を尊ぶ」については、リハビリテーションに関わる専門職として、対象者一人ひとりの命を大切にし、その生活や人生に寄り添う姿勢を学んでほしいと考えています。また「個を敬愛する」とは、集団での治療場面であっても、単に“集団の一員”として扱うのではなく、集団は一人ひとりの個性によって成り立つという理解を持つことを意味します。私は、学生がこの理念を実践できるよう、一人ひとりの患者様の個性や命を尊重し、個別性を大切にした支援の重要性を講義を通して伝えています。

2)理念をもつに至った背景

このような理念を大切に考えるようになった背景には、私がふれあいグループに入り、この理念を教えていただいた経験が大きく影響しています。「人を尊ぶ」ということは本来当たり前の姿勢ですが、日々の生活や医療現場では業務に追われ、つい忘れてしまうことがあります。しかし、決して失ってはならない視点であり、常に念頭に置くべきものだと感じています。「命を尊ぶ」については、高齢者の増加に伴い、一人ひとりの命が軽視されているように見える場面がメディアなどで取り上げられることがあります。けれども、患者様には必ずその方を大切に思う家族や友人が存在します。その命を守り支えるために、私たちはリハビリテーションを通して関わる必要があります。また「個を敬愛す」という理念は、疾患や障害に目が向きがちな医療現場において、病気の前に“その人”がいるという視点を忘れないために重要です。私は、この理念を体現できる作業療法士を育てるため、学生一人ひとりを大切にし、その姿勢が自然と学生に伝わるよう日々の教育に取り組んでいます。

3.　教育の方法・戦略

(1)講義は概略をつかむための導入

私の教育方法の前提として、講義は知識を得るための重要な導入であると考えています。作業療法の学習において、まず全体像や基本的な枠組みを理解することは不可欠です。しかし、講義を「聞くだけ」の形式では、学生が内容を十分に理解できず、試験でも記憶が定着していない場面が見られます。そこで私は、講義では細部に踏み込む前に、まず概要や全体像をつかんでもらうことを重視しています。地図で目的地を示すように、学ぶべき方向性を明確にし、そのうえで途中にある重要な分岐点や理解すべき要素を丁寧に説明する流れを意識しています。

(2)実技は反復練習による理解の深化

講義で得た知識を実際の理解につなげるため、実技や演習を中心とした学習を重視しています。リハビリテーションでは、患者様をどのように観察し、どのように面接するかが極めて重要です。そのため、まず学生同士で面接や観察を繰り返し練習し、視点の持ち方や質問の仕方、必要な情報の捉え方を体験的に学べるようにしています。精神疾患のリハビリテーションは、病気そのものよりも「その人の生活」に働きかける場面が多く、一人ひとりに合わせた個別的な対応が求められます。教科書によって記載内容が異なることもあるため、理解しづらい部分については私が資料を作成し、講義では補足説明を行うことで、学生が迷わず学べるよう工夫しています。

(3)試験は理解度を測るための手段

試験は、学生が講義や実習で学んだ内容をどの程度理解できているかを確認するための手段として位置づけています。講義では全体像を把握し、実習では観察や面接の方法を反復して身につけるという流れを踏まえ、試験では「覚えるべきポイント」を明確に示し、その理解度を問うようにしています。また国家試験対策では、実際の問題を提示し、解き方を説明したうえで学生自身に解いてもらうという手順を取り入れています。これは、山本五十六の「やって見せ、

言って聞かせて…」の精神に通じるもので、まず教員が示し、その後学生が実践することで理解を深める方法です。私は褒めることよりも、学生の成果に対して適切なフィードバックを行うことが成長につながると考えており、その姿勢を大切にしています。

4.　学習成果

授業アンケートでは、昨年度より今年度の方が概ね良好な結果となり、全体平均を上回る評価を得ています。また、以前には自身の教育方法について研究発表を行い、国家試験の成績下位グループへの支援や、下位学年における成績低下傾向者への対策について論文としてまとめています。試験時には自由記載式のアンケートも実施していますが、記名式であるため学生が書ける内容には限りがあります。その中でも、授業内容や話し方、工夫に対して「面白い」「分かりやすい」といった高い評価が多く寄せられており、教育方法が学生に良い影響を与えていると感じています。

5.　改善のための努力

学生アンケートでは大きな指摘はありませんが、私自身の課題として、話し方に抑揚が少ないことや早口になりやすい点を自覚しており、改善に取り組んでいます。また、授業資料では国家試験や臨床に直接関係しない部分を省略することがありますが、その内容について後日質問に来る学生も多くいます。今後は、必要な背景知識も適切に補足し、学生の理解がより深まるよう工夫していきたいと考えています。

6.　今後の目標

今後は、まず自分の話し方を改善し、抑揚をつけながらゆっくり話すことを意識していきます。また、授業では実習や国家試験に直結する重要な内容について、資料を用いて補足しながら講義を進める必要があると考えています。後期の講義では特に話し方に注意し、学生の理解がより深まるよう、自分自身が納得できるレベルまで改善を重ねながら取り組んでいきたいと思います。